

重度・重複障害のある子どもの教科指導と 自立活動の指導の関連Ⅲ

○立岡 里香
(長崎県立長崎特別支援学校)
KEY WORDS: 教科指導

一木 薫
(福岡教育大学)
自立活動 重度・重複障害

古川 勝也
(西九州大学)

I 目的

自立活動の指導について、特別支援学校学習指導要領は、特設した時間における指導を中心として展開するとともに、各教科等の指導と密接な関連を図る必要性を述べている。本研究では、重度・重複障害のある子どもの各教科と自立活動の指導における変容に基づき、各教科と自立活動の指導の関連を図る手続きと実践の成果について検討することを目的とした。

II 方法

本研究における教科指導（国語）と自立活動の指導の関連を整理する手続きを Fig.1 に示した。

(1) 国語の授業における実態及び指導目標の設定

対象児は肢体不自由特別支援学校に在籍する小4 男児である。発語はないが教師の簡単な言葉かけに笑顔や発声で反応したり、教師による絵本の読み聞かせに注意を向けたりすることができることから1 段階相当の内容を学ぶことができると判断し、以下の指導目標を設定した(一部抜粋)。

- ・教師が提示した物を追視することができる
- ・腕や手首を動かす教師の援助を受けながら筆記具を持ち続けて書くことができる。

(2) 自立活動の授業における実態及び課題

自立活動の内容 6 区分に照らして把握した実態から課題を抽出した (Fig.2)。

(3) 国語科における学びにくさと課題関連図の作成

(2) の課題間と国語の授業場面で見られる学びにくさの関連を整理した (Fig.2)。中心課題である「適度な力を入れて座位を保持する力」が改善されると、人や物を見続けたり上肢の操作性が向上したりすると判断した。これらの力の向上により国語の時間に好きな絵本を見続けたり、筆記具を持って書くことができるようになったりするのではないかと考えた。

(4) 自立活動の指導目標の設定

①教師の肩・腰を支える援助を受けて、頭部を起こし、前腕をテーブルについた椅子座位を 30 秒間程度保持することができる、②正中を越えて提示された物を追視し、教師の援助を受けて触れる、握るなどの操作ができる、の 2 つを設定した。

(5) 国語の授業における手だて及び配慮

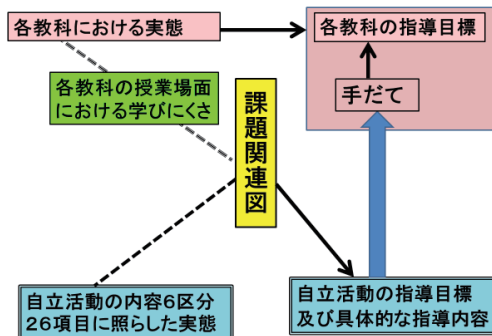


Fig.1 教科及び自立活動の指導の関連を整理する手続き

国語の指導目標を達成させるための手だて及び配慮について、(4) の自立活動の指導目標もふまえて検討した。

提示した絵本や物を見続けることの難しさに対しては頭部を正中で保持する援助をする、対象児から 50 cm 前後離れた場所に物を提示するなどの手だてを講じた。

III 結果

(1) 自立活動の時間における変容

- ・教師の援助を受けての座位、膝立ち位、立位などの保持の際に、体幹をしっかり保持できる力がつき、過度な緊張を入れることが減り姿勢を保持できるようになった。
- ・頭部を保持する援助があれば、左右 45 度の範囲の物を追視できるようになった。
- ・教師の援助を受けて、左手首を上下に動かしてスイッチを押してパソコンの画面を変えることを楽しめるようになった。

(2) 国語の授業における変容

- ・教師が頭部を正中で保持する援助を受けて絵本に登場する動物のぬいぐるみ等を対象児の目の前でゆっくり左右に動かすと追視できるようになってきた。
- ・書見台を使うことで手元を見ることが容易になり、マーカーで線を引く学習では教師の援助を受けて手首を少しずつ動かして書くことができるようになった。

IV 考察

自立活動の指導を通して、適度な力を入れて座位を保持する力が改善され人や物を見る力と上肢の操作性が向上したこと、国語の授業では自立活動の指導を踏まえた手だてを講じたことが、国語の目標達成を促進したと考える。このことから、各教科における学びにくさを自立活動の課題との関連で捉え、各教科の指導で講じた手だてや配慮を自立活動の指導目標を踏まえて検討する手続きの有効性が示された。

高等学校における通級による指導の制度化により、特別支援教育の要となる自立活動の指導の担い手は今後一層拡大する。子どもの障害の種類や程度にかかわらず、教科と自立活動の指導の関連を図る手続きは共通である。その手続きを担保する個別の指導計画の書式の整備と、実践事例の蓄積が今後の課題である。

(TATEOKA Rika, ICHIKI Kaoru, FURUKAWA Katsuya)

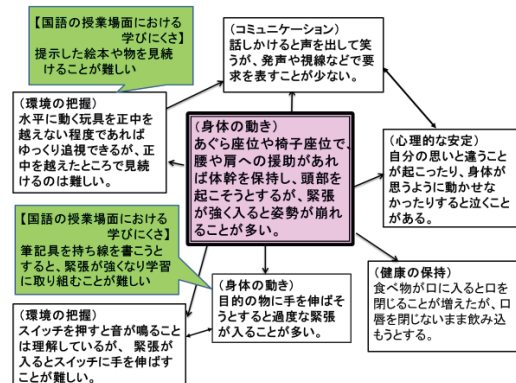


Fig.2 課題関連図